

旧版のまえがき

今、なぜ「心霊」なのでしょう。私のスピリチュアリズムについて語る書はこれです。第一書『心霊入門』（書名を『人は永遠の生命』に改めワンネス・ブックシリーズの第一巻とした）で、霊魂は在ること、死後の世界とは何か、人間の生きる道は愛（奉仕）であると、スピリチュアリズムの概要を述べました。第二書『神の発見』で、スピリチュアリズムは神霊界の大計画で発生させられた近代の新啓示運動であること、その目的は、人間が「自己自身（内在の神性）」を知って、近い未来に神の国を建設し始めること、そこに重点を置きました。さて、第三書のこの『人は神』で私は何を語るのでしょうか。前記三書は、いずれも独立してお読みいただけます。スピリチュアリズムを学ぶために集まった人々を対象に私がお話しした講話の集成が、いずれも前記三書です。第一書は昭和六十年、第二書は昭和六十一年、この第三書は昭和六十二年二月から十二月までの毎月一回の講話のほぼ集成です。そのつど、新しく話を聞く人にも分かるようにお話ししてあります。

ただし、第一、第二、第三書となるにつれてその深度を深めて、この第三書では「人間は神が肉体の衣を着けて地上に姿を現しているもの」、このスピリチュアリズムの神髄にまで触れました。この意味で、スピリチュアリズムとは心霊主義でなく、正しくは神霊主義です。

さて、今、なぜ「心霊」なのでしょう。「豊かさって、何なのだろう？」これは十八歳の高校生の新聞投書です。「私から勉強を取り払ったら何が残るのだろう。趣味に生き甲斐を見出すこともできない。何と情けない人間なのだろう。私は考える。物質的豊かさの中で人々が何かしら不安を感じるのは、精神的豊かさの欠如があるからだ」と。そこで、この高校生は次のように問題を提起しています。「もし何らかの原因で豊富な物がなくなるようなことになったら、人々はどう生きるのか」と。私達はこれに対する回答をもっておりません。世の暴走族、子供のいじめ、青少年の麻薬遊び、どの一つも回答が与えられていない者達の不安と反抗の現れではないでしょうか。そうです、彼らは物だけ与えられて、それ以上に大事な「心」、さらに「霊」については何も教えられていないのです。

今、なぜ“心霊”なのでしようか。今、世界の人口の二倍の百億人分の穀物が毎年生産されています。しかし、五億人の人が毎年餓死線上のストレスにあります。一袋十円の経口補水塩が買えないために、毎年五百万人近い乳幼児が下痢性脱水症で死んでいると、ユニセフ白書は告げています。日本の軍事予算のほんの一〇パーセント、三千七億円を毎年出せば、右の五億人の飢える人に、毎年六〇キロずつの小麦が支給でき、地球上から飢える人が消えます。ほんの七百億円で恒久的に、早死にする乳幼児七百万人の生命が毎年確実に救えるシステムがつけられます。なぜ、人間はそれをしないのでしようか。救うことが出来るのに、救うことをしないのは、まだ人間が愛を知らないからです。地上に愛がないということとは、人間にとって不幸なことです。四国遍路に來ている、もと港湾荷揚げ労働者だったという老人がポツリと言いました。「べつに自分がしあわせになるなんてえこと、そんなこと願かけねえでもいいと思うんだね。自分一人しあわせになつたって何もならねえ。世の中、みんながよくなれば自分もよくなるんだからね」。この七十歳のもと労働者ほどの知恵が人類にはまだないのです。

物より心が大切だということを、人間がまだ知らないのは、宝の山を持ちながら、その存在に気づいていないことです。これを知るためには、「物」のほかに「霊」の存在をまず知らねばなりません。次に、霊が神の分身である、すなわち宝の山である真実を学ばねばなりません。その宝の山を掘り出す方法は、自己の環境も自己の運命も、すべて自分が創り出したものだという、生命の根源の法「因果の法」を知らねばなりません。最後に、その因果の法が神の愛の結晶であることを知るとき、自己がまさしく肉体の衣を着けた神の姿であることに、思い至ります。スピリチュアリズム（神霊主義）はこの真相を伝えるために、近代になって生まれました。この生命の真相を人が知るとき、そのとおりに自己も世界も、真相の姿、すなわち神の国に変容します。

昭和六十三年一月

著者